

No. J2214

人新世を生きる現代メラネシアの人々
：熱帯雨林伐採と現地の自然認識の交点から考える

大阪公立大学 現代システム科学研究科
橋爪太作

本研究は、それ自体はきわめて資本主義的な開発である熱帯雨林伐採が、メラネシアの地域コミュニティで伝統的に営まれてきた自然 - 人間関係に対してどのような顕在的／潜在的影響を与えているのかについて、現地フィールドワークを通じて考察するものである。

本研究は海外フィールドワークを重要な一部としているが、新型コロナウイルスの世界的流行により 2022 年度の渡航は難しかったため、特例措置を使って研究期間を 1 年延長した。

2023 年 8 月 2 日から 8 月 31 日までソロモン諸島に渡航し、うち 7 日から 25 日まで、主要なフィールドであるマライタ島西ファタレカに滞在し調査を行った。現地においては、以前より関係を築いてきた現地の人々と生活を共にし、必要に応じて個別のインタビュー調査を行った。さらに調査の事前準備ならびに得られたデータの分析のため、人類学理論、メラネシア人類学、熱帯雨林生態学に関する先行研究の検討を行った。

調査したトピックは、主に以下の 6 つである。(1) コロナ禍の経験が土地に対する関わりにもたらした影響、(2) 現地における森林伐採の現状と今後、(3) ソロモン諸島をめぐるグローバルな情勢の変化とローカルな開発の接合、(4) 森林伐採事業の動因である内陸部への開発・移住プロジェクトの現状、(5) 伝統文化における植物と人間の関わり、(6) 焼畑農耕を中心とした伝統的生業形態が環境にもたらす影響。

これらの調査から、西ファタレカの人々は自らの祖先の土地という「内向き」の開発を志向しつつ、そのためには必要に応じて国会議員や米中新冷戦のようなナショナル、グローバルな力をも利用しようとしていること、またそうした政治経済的な変化の背後で、植物と人間をともに人格としてとらえ、両者の共生をはかる思考があることが明らかになりつつある。

以上の研究活動を元に、国内学会での発表および自身の単著での成果の一部の公刊を行った。今後さらに研究成果の分析を深めるとともに、研究発表、学会誌への論文投稿などを進めていく予定である。